

日本ヒューマン・ケア心理学会第十八回大会を開催して

埼玉県立大学 鈴木 玲子

ヒューマンケアを支える専門職者のキャリア開発

平成二十八年九月二十四・二十五日に日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第十八回大会を、埼玉県越谷市にある埼玉県立大学において開催いたしました。今大会は、保健医療福祉の発展を目指した学会である埼玉県立大学保健医療福祉科学学会と共同開催とし、この学術的交流により視野を広げてヒューマンケアを見つめました。大会テーマは「ヒューマンケアを支える専門職者のキャリア開発」で、保健医療福祉分野を担う専門職のキャリア開発と多職種連携の推進について考える機会となりました。一日目のポスター発表、共同シンポジウム、懇親会の三つの合同プログラムにおいて、学会の学術的交流を図ることができました。一日目の研修会には六十七名（会員五十三名、非会員十七名）、二日目の研修会には五十五名（会員二十九名、非会員二十三名）の方に参加いただきました。参加いただいた会員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

大会一日目の一般演題には三十一題（口頭五題、ポスター二十六題）の発表がありました。また基調講演として「アイデンティティ論からみたプロフェッショナルの生成と深化—「人」と「専門性」をどう育てるかー」を岡本祐子先生（広島大学大学院）にご講演いただきました。専門家としてのアイデンティティ獲得の研究を通して、次世代の専門家育成のためのキーとなる考え方についてご説明いただきました。そのほか、二つの学会による共同シンポジウムでは「多職種連携の醸醐味と地域包括ケアへの展望」として、埼玉県立大学の伊藤善典先生、開業医の鶴岡優子先生、看護師で介護支援員の池上昌子先生、理学療法士の前園徹先生、学校心理士の中村恵子先生による専門職の活動と多様な連携の可能性について意見交換がなされ、子どもから高齢者、障がいのあるある方を含めた地域包括ケアを目指すための連携について考える機会となりました。



大会長 鈴木玲子先生

大会一日目の研修会は、小塩真司先生（早稲田大学文学学術院）に「ヒューマンケアにおける実証研究を支える調査法 A to Z」を講義いたしました。参加者からの意見も取り入れながらの調査研究に関する講義で、参加者からは、「統計手法の疑問が解決した」「とても勉強になった」など充実した感想も聞かれ、研修会終了後には質問者で列をなすほど大盛況でした。今大会は共同開催であることから、早くから二つの学会で相談しながら計画を進めてきました。一つの企画を考えるにも、とがきましたことで報われた気持ちを感じております。大会意見を交わし、互いを理解しあって作業を進める苦労を感じることもありましたが、遠方から多くの参加者をお迎えすることができました。

大会一日目の研修会は、小塩真司先生（早稲田大学文学学術院）に「ヒューマンケアにおける実証研究を支える調査法 A to Z」を講義いたしました。参加者からの意見も取り入れながらの調査研究に関する講義で、参加者からは、「統計手法の疑問が解決した」「とても勉強になった」など充実した感想も聞かれ、研修会終了後には質問者で列をなすほど大盛況でした。今大会は共同開催であることから、早くから二つの学会で相談しながら計画を進めてきました。一つの企画を考えるにも、とがきましたことで報われた気持ちを感じております。大会意見を交わし、互いを理解しあって作業を進める苦労を感じることもありましたが、遠方から多くの参加者をお迎えすることができました。

最優秀発表賞 口頭発表部門 「第十八回優秀発表賞を受賞して」

東京成徳大学 関谷 大輝

最優秀発表賞 ポスター発表部門 「第十八回優秀発表賞を受賞して」

日本学術振興会 特別研究員PD 東京成徳大学 応用心理学部 佐藤 修哉

学術集会第十八回大会に参加して

埼玉県立大学 宮部（森山）明美

までの至らない、ということをよく耳にします。今回の小塩先生による「調査法 A to Z」によって、分析手法やバス図に苦手意識を抱かれていた方も、基礎の基礎から理解することができる、そんな研修会であったように思えます。

（埼玉学園大学臨床心理カウンセリングセンター 宮戸悠貴）

このたびは、学術集会第十八回大会において口頭発表部門の優秀発表賞にお選びいただき、大変光栄に存じております。会場にお集まりいただきました先生方、ご審査をいたしました先生方、そして、本研究の実施にご協力をいたいた皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今回は、ミャンマーからの留学生であるナン・カンキンさんとの共同研究の結果を発表させていただきました。ミャンマーは、いわゆる観光旅行先としては、日本人の多くにとって、残念ながらまだあまり馴染みのない国かもしれません。しかし、ノーベル平和賞を受賞し、同国のリーダーであるアウン・サン・スー・チー氏の名前は、ほとんどの方がご存知のことだと思います。

本研究では、在日ミャンマー人（含む留学生）と日本人を対象に、質問紙調査を行いました。主な研究目的は、友人集団との関係の持ち方や、友人集団の捉え方の特徴を比較することでした。研究への着想は、ナンさんが抱いた「日本人は、グループの存在を非常に意識し、それが友人関係を左右する」というある種の「違和感」にあります。友人グループとの関わりについては、たとえば佐藤（一九九五）や高坂（二〇一〇）などにおいて、日本人の特徴の端が指摘されていますが、他国・多文化との比較データは必ずしも多くはありません。特に、ミャンマー人の比較は前例がなく、今回の中間集団への信頼感が高い」といったことが分かりました。

日本人の特徴を深く理解することは、ひいては来日する外国人へ支援にもつながります。本研究で見られたような「日本への信頼感が高い」といったことが分かりました。

これまで至らない、ということをよく耳にします。今回の小塩先生による「調査法 A to Z」によって、分析手法やバス図に苦手意識を抱かれていた方も、基礎の基礎から理解することができる、そんな研修会であったように思えます。

（埼玉学園大学臨床心理カウンセリングセンター 宮戸悠貴）

本人ならではの特徴は、おそらく他領域でも様々な形で見出だせるものと思われます。今回の研究を糧に、文化差の視点を忘れないように今後の研究に取り組んでいきたいと考えます。

この度は、優秀発表賞を授与していただき、大変光栄に感じております。調査にご協力いただいた学校の先生方や生徒のみなさん、審査に携わってくださった先生方、連名発表者の上埜高志先生（東北大）、安保英勇先生（東北大）、内田知宏先生（尚絅学院大学）に、心より感謝申し上げます。

今回、「メンタルヘルスリテラシー向上を目的としたプログラムの効果－諸要因を用いた群分けによる検討－」と題し発表いたしました。プログラムそのものの効果については、統制群との比較を通じてすでに明らかとなつており、詳細につきましては、本学会における過去の学術集会でも発表させていただいておりました。今回の発表では、もう少し踏み込み、どのような特徴をもつた群に対しても、どのような効果が得られるのかということについて検討しました。より効果的なプログラムの作成に向けて知見を得ることが目的でした。

検討の結果、私的自意識の高い群や家族機能が低い群、抑うつが高い群に対して、より効果をもたらすプログラムであったことが示され、臨床的に意義のあるプログラムであることが明らかになりました。今後、さらに活動を展開していくためのエビデンスを得ることができます。また、より効果をもたらす対象が明らかになつたことで、さらに効果的なプログラムを作成していくためのヒントも得られました。

もともと、この研究をはじめるにあたり「予防」の考え方を大切にしたいと考えていました。一九六五年のボストン会議を端緒として「コミュニケーション心理学が確立されて以来、予防の考え方が重視されるようになってきています。特に、昨今は、ストレス社会ともいわれる現代において、メンタルヘルスに関する予防的重要性がさらに強く認識されるようになります。

大会一日目の研修会は、小塩真司先生（早稲田大学文学学術院）に「ヒューマンケアにおける実証研究を支える調査法 A to Z」を講義いたしました。参加者からの意見も取り入れながらの調査研究に関する講義で、参加者からは、「統計手法の疑問が解決した」「とても勉強になった」など充実した感想も聞かれ、研修会終了後には質問者で列をなすほど大盛況でした。

今大会は共同開催であることから、早くから二つの学会で相談しながら計画を進めてきました。一つの企画を考えるにも、とがきましたことで報われた気持ちを感じております。大会意見を交わし、互いを理解しあって作業を進める苦労を感じることもありましたが、遠方から多くの参加者をお迎えすることができました。

大会一日目の研修会は、小塩真司先生（早稲田大学文学学術院）に「ヒューマンケアにおける実証研究を支える調査法 A to Z」を講義いたしました。参加者からの意見も取り入れながらの調査研究に関する講義で、参加者からは、「統計手法の疑問が解決した」「とても勉強になった」など充実した感想も聞かれ、研修会終了後には質問者で列をなすほど大盛況でした。

今大会は共同開催であることから、早くから二つの学会で相談しながら計画を進めてきました。一つの企画を考えるにも、とがきましたことで報われた気持ちを感じ

